

浮かび上がる庶民の姿

昭和40年代後半（1970年代前半）のことである。出版社での編集者生活を絶ち、物書きとして自立しようと考えたときに、ささやかな志を立てた。昭和史を実証的に確かめたいと思っただけの自立であったが、年表の1行を1冊にと企図したのである。

もともと年表を見るのは高校時代から好きであった。歴史の授業そのものは特別に関心を持っていたわけではない。しかし年表を眺めていると、編者によって項目の拾い上げ方も異なるし、なによりその編者の思想や政治的立ち位置によって項目の記述も異なっている。そういう微妙な差が私には面白かったのである。ある年表では戦時下に海軍の水兵が共産主義に共鳴して運動を起こしたかのような項目があった。

よく調べると、水兵が街に遊びに出た折に、ポケットに反対ビラを押し込まれただけのようで、とても海軍内部での反戦運動などという代物ではなかった。

私がこの志を立てたのは、太平洋戦争を体験した次の世代＝私は昭和21（46）年4月に国民学校に入学＝として、この戦争を「日本が中国や東南アジアに侵略した」と語るだけでは、歴史を継承することにならないのではないかと考えたからだ。確かにこの見方は間違いではない。しかしなぜまだ20歳を超えたばかりの青年兵士たちが鉄砲をかついで中国の奥地にまで行かなければならなかったのか、なぜ今なお太平洋の海底に沈められた輸送船の中で白骨化していなければならないのか、その実態を解明しないと歴史の継承にならないと思うからである。

私の第1作は「死なう団事件」である（72年刊行）。これも昭和12（37）年2月17日の年表に「死のう団、都内5カ所で切腹自殺未遂」とある1行に関心を持ってのことだった。続いて昭和7（32）年5月15日の、いわゆる「5・15事件」の折に陸海軍の軍人や陸軍士官候補生などとは別に「農民同志」という一行が参加したとある。この一行は水戸市の農本主義者である橋孝三郎と愛郷塾を指している。彼らはなぜこの計画に加わったか。

こうした1行を入りに事件や事象の姿を追いかけていくと、見えてくるのは、時代と格闘する庶民のナマの姿である。暗躍する特高警察、政治・社会の改革を求める青年たちの直線的な志向、そして多くの関係者たちの苦悩と不安や恐れが、ひとつの空間となって浮かび上がってくる。

「死なう団」では、平凡な青年たちが拷問などで自殺に追いやられ、事件から30年余を過ぎていても、人々の傷は癒えていなかった。

年表の1行を1冊に、という私の考えは、2・26事件後に陸軍省内に「軍務課を新設」という項目を追いかけたときに、より重要だと確信に達した。この軍務課に身を置いた一佐官の目を通して、日米戦争の実態が浮かび上がってきたのである。

著述家として40年近く過ごしてきて、全ての著作がそうだったわけではないが、「1行を1冊に」という視点の書は、その後も何冊か書き続けてきた。昭和12（37）年に「昭和の大逆事件。農村青年社指導者逮捕」とあるのも、アナキストたちが農村解放を考えたというだけで、具体的な行動は起こしていない。それを治安維持法で逮捕して強引に、幸徳秋水らの明治の大逆事件に結びつけるのは、まさに司法官僚たちの功名争いであった。この事件も調べれば調べるほど、その根は深く、大正・昭和初期のアナキストの生態もまた浮かび上がってくる。今、論じられている共謀罪の怖さとも重なり合ってくる。

「ヤミ金融『光クラブ』の学生社長、山崎晃嗣が倒産自殺」＝昭和24（49）年11月24日＝という1行もある。東大生、山崎はなぜ高利貸しに手を染めたのか。そのプロセスを関係者の証言を元にたどっていくと、学徒出陣した山崎は軍隊教育であまりにも理不尽な出来事に遭い、人間不信に陥った。まさに戦争による悲劇だったのだ。山崎と少年期からの友人だったある法曹人が語った一言は忘れられない。

「山崎は真面目で寡黙で学問好きの少年だった。彼の心底に眠っている軍事（暴力）への嫌悪があ

のような事件につながっている」

私たちの一生は、だいたい年表の1行にもならないで終わる。しかし事件に巻き込まれたときには、その1行の中に凝縮した形になってしまう。つまりその1行は、年表の中で呼吸をし続けている。それに気づいたとき、私たちは歴史家になりうるのである。